博士論文要旨

中国北朝石窟の研究―敦煌莫高窟第二八五窟を中心として

B1LD1024　李　銀廣

（歴史科学専攻　東洋･日本美術史専攻分野）

はじめに

敦煌莫高窟（北緯 40.1°東経 94.5°）は中国西北部のタクラマカン砂漠の東端に位置する。現在の莫高窟は、石窟が六百余現存し、そのうち壁画や塑像のある石窟が四百九十二で、石窟の中には塑像が二千四百余体ある。これらはいずれも絵画、彫塑、建築、仏教などの分野を研究する上で重要な資料である 5。

その中の第二八五窟は莫高窟にある重要な石窟であり、西魏大統四年（五三八）、大統五年（五三九）の墨書題記がある。現存する莫高窟北朝時代の石窟で、具体的な年代を記載する石窟はこれただ一つである。

第一章、西壁における日天像と月天像の伝来と構成思想の再検討

莫高窟第二八五窟は正面西壁中央に円拱龕の大仏龕を開き、仏倚像を安置して本尊とする。中央大仏龕外の北側には上部は三面六臂の摩醯首羅天とし、南側の上部は、趺坐する三面八臂の那羅延天が描かれている。西壁の最上部は、垂帳紋の下に青い地色を塗る帯状の部分があり、その中に日天像と月天像が描かれている。

第一章では、西壁に描かれた諸天像に対して、その姿と宗教的機能を再検討しつつ、古代インドの宗教図像とキジル石窟の天相図との比較を通じて、西壁の日天と月天の中国伝来、および二天を一壁面に描いた配置構成について、すべてインドから西域各国を経由して敦煌莫高窟に伝来したとことを明らかにした。さらに、西壁の坐禅僧像は、仏の二脇侍の位置に安置され、頭光や、飛天、蓮華紋などを配置することで、神格化した高僧を表した上、弥勒菩薩像を真似て逆三角形の飾りが描かれたことを指摘した。これに関しては、兜率天への往生を祈願することも、現世の弥勒を暗示することも、「三世」思想に基づいた弥勒思想と密接な関係があると考える。加えて、西壁の配置構成については、上部を「天空」とし、下部を「現世の人間世界」とし、向かって左側を「昼」とし、右側を「夜」とすると指摘した。それは、『華厳経』に現れている世界観と同じく、西壁の配置構成が「十方三世」思想に基づいた大乗仏教の広い世界観を表していると考えられる。

第二章、南壁故事画の所依経典の再検討

第二章では南壁に描かれた五つの故事画について考察した。それら五つの所依経典における共通点によって、南壁故事画の所依経典は、大乗仏教の「十方三世」

の世界観に基づき、「三帰」と「五戒」などの宗教的思想を表していると考えられる。

第三章、南壁故事画に見える弥勒三会

第三章では、第二章で得られた結果に基づいて、故事画における特色ある場面とその宗教的意味、および南壁の配置構成を論じた。第二八五窟南壁に描かれた五つの故事画は、固有の仏教因縁で「十方三世」の世界観に基づいた「五戒」と「三帰」の思想を表し、弥勒経典中の言語を抽象的なものとしてとらえて、象徴的な記号である故事画に転化し、画面に「弥勒三会」に値遇する願いを入れ込んだ特有の美術作品を描いたと考えられる。なお、南壁の構図を見れば、五つの故事画をあわせて弥勒三会の思想を表していることが分かるが、「五百強盗成仏図」は、一図だけで二つの意味(第二会の「三帰」と第三会の「一称南無仏」)を解釈させようにと意図したことが認められる。

第四章、南壁故事画と『仏説弥勒大成仏経』とその宗教的機能

第四章では、故事画の所依経典とそれにおける特有の場面とを合わせて、『仏説弥勒大成仏経』との関係と宗教的機能を明らかにした。西魏時代は、中国西北地方の戦乱により「末法思想」が流行していたが、「末法世界」の人々はこうした現実を背景に、故事画のように三宝を信じず、さらに、戦乱のため強盗などの悪勢力が広くあった。仏教信者としての第二八五窟の供養者達は、現実社会への不安を多く持ちながら、未来の理想的な社会(弥勒の世界)を渇望したと考えられる。

第五章、第二八五窟造型再考　−当初の安置仏塔とその宗教的機能を中心として

第二八五窟は前後式（前窟と主窟）であり、主窟は伏斗形の天井と下部の方形窟を組み合わせている。主室は西壁に仏龕三基を設けるほか、南北の両側壁に禅窟四つを開く。なお、石窟中央には方形の土壇が残されている。数多くの先行研究は、この「中央方壇」を証拠として、石窟の造型や宗教的機能、及び時代的･地域的な特徴などをそれぞれ論述した。ただし、ペリオ探検隊の記録写真によれば、当初の石窟中央には、現存の低い土壇ではなく、高い建造物の中央仏塔があったと見られる。

第五章では、ペリオ探検隊の記録写真や、現地調査などにより、第二八五窟中央には仏塔が安置されていたと認められた。そして、中央仏塔の造型とその上の獅子像を西壁の画風との比較することにより、中央の仏塔がインド風のストゥーパの性格を持ち、北魏に造営された可能性があると推定した。また、西域に建造されたインド風のストゥーパ跡が現存しているが、窟内に安置する中央仏塔としては、キジル石窟や敦煌地方の石窟中において例が少ないという現状がある。そ

れに対して、第二八五窟に造営されたインド風のストゥーパは、この石窟における特有の性格と位置づけられる。

論文審査結果の要旨および担当者

提　　出　　者	李　銀廣
論文審査担当者	（主査）教授　　長岡　龍作 教授　　泉　武夫 教授　　尾崎　彰宏 教授　　川合　安 准教授　芳賀　京子
論　　文　　名	中国北朝石窟の研究―敦煌莫高窟第二八五窟を中心として―

本論文は、敦煌莫高窟の最重要窟の一つに数えられる、第285窟の壁画と石窟の構成について、新たに考察を加えたものである。第285窟は北壁に、莫高窟中最古の西魏大統四年（538）の造像銘記を遺す窟として知られている。論文は、同窟の壁画のうち、特に西壁と南壁に着目して図像と典拠経典の検討から思想内容を新たに解釈する四章と、古写真に基づき、当初は石窟中央に仏塔が存在したことを示す一章からなっている。

まず序章では、第285窟の概要と研究史を、西壁、南壁、北壁・東壁・天井画、石窟形式と造営者の各項目において確認する。続く第一章では、西壁をとりあげ、従来、中国の墓葬美術の日月表現との関連がいわれていた日天・月天像の図像について、その系譜を辿り、インドから西域経由でもたらされた表現であることを説得的に検証した。さらに、中尊両側の高僧像が兜率天往生信仰と関わるとする新解釈を示した。

本論文の最も大きな成果は、南壁の壁画に対する新解釈である。論文ではそれを、第二、第三、第四章を通して議論する。第二章では、「五百強盗成仏図」、「化跋提長者及姊縁」、「仏度水牛生天縁」、「沙弥守戒自殺図」、「施身聞偈図」の五種類の故事画について、その典拠となる経典を図様との関係から確認した。第三章では、これらの故事画のうち「五百強盗成仏図」、「沙弥守戒自殺図」、「施身聞偈図」に見られる特色ある表現の意味について検討した。「五百強盗成仏図」では、強盗が仏の説法を聞いて沙弥となり禅定するという場面展開が、「帰依仏」・「帰依法」・「帰依僧」の「三帰」思想に対応するとし、また、「沙弥守戒自殺図」の主題も「三帰五戒」であるとした。そして、「施身聞偈図」も含め、いずれも弥勒三会への値遇を願う内容であると論じた。第四章では、この論旨を、『仏説弥勒大成仏経』の内容と故事画の対応関係を確認しながら再説し、南壁の主題が弥勒三会への値遇であるという主張を補強した。

また、第五章では、ペリオ撮影の古写真を詳細に検討して、石窟中央に現状方壇状に残っている遺構が、本来は、インド由来の方形基壇上の円形の仏塔であったことを復元した。また、現地調査によってその大きさを復原した上で、第285窟開鑿当初の遺構であるとした。

莫高窟中の最重要窟である第285窟には多くの先行研究があるが、その中にあって、本論文は、多くの新たな知見を示しており、斯界へ寄与するところは大である。よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格があると認められる。